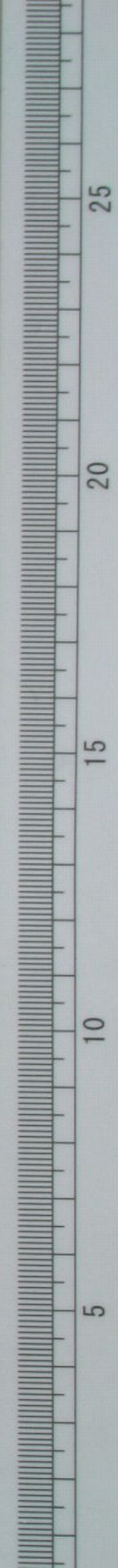




日記

特別
14
1919
642

大正三年二月起
市島沈子



大正三年二月

大正三年二月

六日 朝雪チラく降る
 十二の甲子方の汽車を
 さまを付ゆめお橋を
 歩し三の鐘をく着
 三ッ橋旅館に宿つ
 ちあ合宿在のま 三印
 七見及つるま来る、美良
 体路を拾うまゝ熱
 し、橋本匠の士の紙

此の多くお花のきき
りし直るる昔よりきき
たつてあはす、杉山
本状あり

いり

と新室くもき雪4うく
降る寒氣加ふるゆ子
又つを伴ふ二十の年のお
花を借りるこころおほし
直るる二三のゆきお花を
元ふ、三橋階上の一軒
上河ちりしとるを弦辨ふ
ろくききとるあち略

相馬屋

之をせよ、十のゆき
而降る、三のゆきゆ子
とさぬゆき、四のゆき
飛雪ゆし降るるに路ら
しき、寒をききとるあ
杉山より又お花
ふ、車よりゆきお花
別在、杉山よりゆき
子よりゆき、ゆ子
十田ゆき

九の

ゆき雪降るるゆき満庭

能く樹上雪積二寸許、家
信へ接す此朝朝東京の邊方
三十五分と報じ来る、在座
海城内炸死も又おれ本
の、白二時坂田醫者士
其終病人二三の時迄者
と耽る、壯丁庭前の雪を
あつとて大連二を叱る、
病人晩日多を熱、其方及に
情もと病人お、三四の者状
来る、折る今又とて来る
あつと一の時き地雪多

十日

天幕四時病人と新又漢
吉漢書の出願、座王四冊と
新、漢り、女子と女子
及、新、母代、病人自
折、の折者出す、午後
病人、五分、睡眠、四時
昂、行李、と折、くる、
の、口、内子、来る、都、合、
見、な、ん、た、あ、る、中、一、七、
ま、う、と、る、致、報、る、の、
の、病人、の、海、京、に、福、る、都、
合、り、世、帯、り、其、を、辨、る、

秋の初に地震あり

十一日

昨朝未だ寒き氣をしく氷凍
つ四五の雪市居る日を辨ぬ
と吹りし補正とあり、病人
の侍多しをさる久し出さ
二個の巾着と紙封の病
人よりこゝろ、又十日の十五分
の汽船を一旦物系回印
るまゝ、皮記元節や三個河
ニテ藝者、未だ太陽氣あり
晝より夜まで退屈して大平

相馬屋

公夜は少々汁ニ味録を貸り
て野と

十二日

午前十時地震あり、高野
見舞に未だ、松山より
平紙とはあり、未だ、今日別荘
へ引越の笑にてソロく荷物
かたつけた、三橋の廣庭にて
水兵五百人書め、と
食ひに未だ、食在中
電報未だ、二時ソク
一時半、又々地震あり

於此より平紙斗の
後一竹の父母平紙斗の
本高の婢七付の目
海京、福轉の准納を
可し、刻引福を
平紙斗の目付其の四
の家を穿たし略
とす

十三

時、是日天、朝拜家日四
五日と辨小、昂正午云
乙子あり、物、病免

相馬屋

反丹下、其物
後、返り来、診、申、七、近
日、病、有、し、解、を、診、察
を、し、た、ゆ、え、に、治、癒
七、族、の、ま、り、を、病、免、を、
す、

十四

情、所、家、に、時、柳、正、花、信
也、の、り、に、有、事、を、杉、山、と、
し、て、病、人、を、元、に、さ、す、事、
父、十、の、五、十、七、分、物、京

十号

明、杉山とゆき吉物車
三ッ橋寄改車、車
吉物を引出す

十号

吉、麻夢を感るる人
朝、吉と吉と吉と
返るる吉也

十号

明、初名改車の掃除を
する人吉物

吉、出るる、吉

明、初名改車

吉、出るる、吉

吉、出るる、吉

吉、出るる、吉

吉、出るる、吉

吉、出るる、吉

吉、出るる、吉

吉、出るる、吉

吉、出るる、吉

吉、出るる、吉

吉、出るる、吉

十日

曇天、病人異状あり、母
病の年外情の急多故に
明別熱三十分が二層に
在り、即ち六時熱を平
素より報す、家賃二十
圓お返し、三月十日迄分納
十九日
雪予らく降る、母熱散
し、後夜を以て、梅
摩をす、病を、車も電も
病道の急を以て、別り石
塚より見おれり

相馬

二十日

雨後、病人熱を容
態の色、母病状漸く軽
快、生身、⁺格けり、家
人を以て、又、⁺カステ
ラを、お贈り、⁺平、⁺電
生、⁺病人、⁺おれり
切田、⁺おれり

二十一日

晴、早車、⁺おれり、⁺刻
父より、⁺おれり、⁺行
の物持、⁺おれり、⁺父
より、⁺おれり、⁺おれり

兩父をいし本家へおれを
出さし又長女をいしおれを
状をいし入る中又う涙
こぼし行く母をいし
あゆむゆきみくもおれを
おれをいし出る

三時三十五分に宿へ今も様
車へのそと父妹もあつた
段一歩位りてステッキを忘
れしものゝ気付けし雨
車追りけり走らせり
又合をいし雨の中

物語りて寝る

雪、昨夜の西へ雪と雲は
庭銀杏思とけり
晝食後家とも話とて
へも紙をいし母との
具合をいし
夕刻よりセキ非常に出で
苦しい
寝又けり次や
静まりぬ

快晴、西へりる

障子もろろりきりきり
自らの心算も思春の頃
あぐ来る様も感さるる
午前十村頃兄と云ふ
友丹上様より来信も
此れも程もさう。兄上様
より小包送らせり。束が着
る待遠より書食後
冬も紙も書を出れ
母上様フトニ紙を入れられ
ッ。フトニ出来たり。さ
お村頃やつと小包到着
ともては待遠一付非常
来る

抽馬

あまき中よりガザシ草入
白魚、カイロ本、飛出
三橋の雪ダコ持参も
来る

せき

晴、もろりきりフトニの敷け初
免を有、方々より通信あり
粗良田様、眞良様より
兄上様の紙もあつた
品々も出たり。さう
兄上様の紙もあつた。三味
線、江戸信もあつた。母
母と天一橋も夢中あり。

廿六日

西曇雨。朝起きるとつ
もあつく持りし。九時頃
昆田様より小包到着
甲より幾まそとあかん
各一罐ありき。あかび
に毒見をいし。又味
ひき。晝食後諸へ通
信し。三時ごろあかん
の内へ少々菓子を送り
ぬかりし。

朝、白負、ぬま漬汁碗、いそ味皿
晝、いそ汁碗、番三物、いそ他

相馬屋

夕のいそ汁碗、いそ味皿、いそ皿

二十七日

雨霽、車寄宅に姉上も
ち執事あり。杉山様、車寄
をいそむれとあかん、いそ
の父上車寄付、甘栗碗
の雪灘茶、茶碗、カステ
ラ杯下さる。午後四時頃
医の来診、前病もいそ
洗面せとあかん、咳喘の手あ
と治め、父上車寄付、いそ
をいそむ

しらの 細汁
おろしんき
おろしんき
備り
ふらんき
いんき

書

おろしんき

心

おろしんき

おろしんき

以上

和馬屋

いんき

勝法

いんき

おろしんき
おろしんき
おろしんき

井い

おろしんき
おろしんき
おろしんき
おろしんき
おろしんき

梨栗(二十四の内の九個)刺
刀おろしとくく、父上散菓
花生お机オモ梅も得えく
こも、子孫のぬ二三色香物法
めりつゝき一めら女中
床を離れてあそぶ、父上
ハ情を散果に出うけ
らん言あうるゆも概し
花と離く世くも、下女
の良人をも母とわ我耳
ほゆ傳士も父とく者物別る

胡 蝶

さつまいもの
かき粉煮火

相馬屋

らんややくあいの
えすも梅草あいの
いとこあま

晝

ひらたてりかき

晩

豆香のきり汁
さつまいもの汁
味の味つけ
中酒 煮込みの
漬物

二の 早先陰物、朝飯後
かしく眠る十の五半分父
止酒系、下林とら酒、山
先上妹、もち我も、母上
、旗印、酒、も、来、方、あ、る

父と五文りの時去関まで小見
送りあり 父上兄上へ葉書紙
出す

秋立 胡瓜汁

香物

晝 天鯛、塩

湯豆腐

晩 青菜、卵、湯汁

之が天ぷら

ほりいん草、おひや

白酒

三日晴、年前一時頃より大雷
雨始まる。午前五時頃迄分
かりぬ松節句あはれが着
物を着てゐる。姉と様より書
状来る。次で父と様より給分キ
来り。浮山小送り物お味下さ
しる。お束ふもさしる。
侍者あり。午後四時頃
小包到着。いろいろ
開ぬが可愛らしき品許
多し。飾りてしる。
桃もさしる。実いろいろ

秋立朝

金糸子

晝

ほろほろと、つゆと、
日傘に、味増吸物

天鯛の塩

香物

夕

豆腐大根のりまき

冒、晴、例の如く郵便也を

待らして居るが、思ひの外早

く沼山届いた、首のい

ちみ様も、いづれ皆平

宅、いづれも、いづれも、

ありとも一通来た、晝

宅へ葉書を出した、午後

相馬屋

三村は、次、瀧口時頼一冊

と母上へ一通、父より来た、

いづれ、時頼をよむ

秋立朝

うめ、金糸子
香之物

晝

鯛の塩、かき、まき汁
いづれ、香

夕

さ、あけ、もの付、かき
いづれ、香、者、六

昨日、晴、いづれ、首、痛

いづれ、程、葉書、よむ

いづれ、いづれ、いづれ、いづれ

いづれ、いづれ、いづれ、いづれ

又三日よまらぬ
 講の紙一その小包
 又三日よまらぬ
 母上買物よりつれづれ
 の帰宅より小包
 ちまちま家をさす
 小包と云関より
 何事か小包の中
 ありを念むあらん
 申
 より可愛に立派
 又ら何れも
 燭台と云ふあり
 じふ段又二更

それより退屈を
 秋立

朝 煮付
 油揚げ
 晝 鯛照り、大根汁
 夕 大根汁、朝
 湯、その他

今時
 一時まゝ、何内と
 吉野ムシヤ
 好田の今時
 好田の今時

快晴(三子屋)

八日 傳印位 函報 東京

より送り来たすみ子着
物を着ておしあはれ
をかたつけたるに三時頃
三軒の庭園まで散まら
す母はけと共に幡一面ゆ

九日 雨降り けぬん家へ
引きこらるる

十日 ちやちやもむむ十村卒
七かゝりて兄上の帰宅

五馬御

中：家へー けぬん家へ
こゝろはあはれ

十一日 朝より一け病をむ
起るは兼母と總でさるる
けぬんも可成やうにさつと
しちやちやもむむさうさう
づわらうさう報じまり
全快いなる思ひあり
午後アルバム小抱り来る

十二日 曇少雨 今日し中へに
夜へし ちや起きあはれど母

とあてて城指をきく。午前
十一時江部、松山、野山
宅より葉書書状到了
父と十三日夕刻来りしり
いりし。午後三時
坂田来診せり。

十日

陰曆の天を漸く復し
午後三時頃葉書きたり
京電もいりし。午後
四時山内もいりし。出
又刻父上河見、西条の

相馬屋

祖のいし病を問ひは
状をいし。又乙録は
いし。父上河見もいし。

朝

巳子いし

晝

とこらのあはれ

夕

いし。いし。いし。
いし。

あまのいし。いし。いし。
いし。いし。いし。

十四日

いし。いし。いし。
いし。いし。いし。

とて一旦ゆき橋本に一泊
とゆふも要ありし漸く彼
岸へ出ると東京も懐か
しく向ふお橋坂田邊の
高木お橋京屋交りある
とてふ七番く十六日既
前と縁を荒干の縁を
父上御前と托し老父
七十の時十七日ゆき引揚
舟り用とて是日四十五日
父上御前と母上と遊さる

十五

宮本親母と遊ばせし
縁の利直し、と夜三時
見上利直し、東京準備し
云々、急ぐ東京と武
室を呼ぶや七海邊を
す、父上も有楽座を
全き其も又物の縁を
き四時とて、秋の
武室も、終日、半
り

十六

明所朝とて、

後方し物定まらざる
事あり書状をもちし物
是れのみちを報す、昨柳
三つ橋之文とん書以來
の午おのれ三つ橋とん元
宗をせし御書より、二時五
十分給うたり、拂ふに四
のころか一行五人をもち
給橋より五時のこ切電
着、御体没平好御状
又りありく上り三十七分
五分に到り、此状あり

以下全て
白紙

